



地租改正利害得失見込書

643



係ル所ナリ方今維新之際大綱僅ニ立ツ下
云凡百揆未ク挙ラズ此時ニ在テ此事ヲ行フ
所謂太早計タル者ニ似タリ且新法ヲ行ハル
ル地稅ハ減ヌヘキ事理更リ下聞ク抑此議
由テ起ル別言已ク可ラセモ人者有テ然ルカ
將夕一二事ヲ好テ切テ喜フ人ノ首唱シ
同臭ノ徒附和雷同之徒然ルカ願クハ旧法ノ
改正セザル可ラザル所以ヲ聞ク
答曰稅法ハ要ハ單ニ均平簡易ヲ貴フ然ルニ
我國租稅ハ旧法タル宿弊積重上田下田其位
ヲ換ルモノアリ同等ノ地價高ク租稅ハ相倍
蓰スルモノアリ畸輕畸重民產ノ盈縮ハ民力
盛衰ハ其致也實ニ甚シ是政府ノ義務ヲ

地稅改正論

大正五年十一月十四日

心漸シテ改正セザル可ラザルモノナリ然リ
而テ旧法ニ就テ之ヲ潤色セズ則欲ク必是
換見法ニ由テ之ヲ得テ換見法ニ由テ之ヲ
改正セズ則欲スル其跡ニテ行ハル難ク且行
天害ノ心モハ一カテテ請フ其略ヲ舉ゲテ
旧藩々換地ノ方法常定テテ不單繩ニ延縮
與地切添切開ノ其同シ久一反ト稱テ一可
自呼スモ廣狹遙意同シカレバ故ニ換見ヲ為
事片欲スル先ニ換地ヲ其サレ可ク換地
大法ハ今決シテ行別可ラズ(第四款ヲ見テ凡
富國ノ要物產ヲ増殖スルニ急テ凡ハ十
土地ハ造他ノ無尽藏ニシテ物產増殖ノ淵源
ナリ換見ノ法ハ年々土地ノ收利ヲ算シテ

地稅改正論

才折半云々官民ニ方以人民銳意勉強シテ地
 カヲ尽ス云々之ヲシテ遺利ヲラシメテ地力決
 シテ尽スヲ得テ物産決シテ増殖ス可ラズ新
 法ハ之ヲ反シ五年間ヲ約シテ定稅トス其懶
 惰ナルモノハ戒心アリ其勤勉ナルモノハ愈
 奮勵ス地力以テ尽スベク物産以テ興ルベシ
 凡財政ノ要ハ年々其次年ハ出入ヲ概算シ豫
 メ之カ謀ヲ十シ非常ノ事故アリテ非レハ大
 差違ナカラシムルヲ奉トス換見ノ法ヲ用ユ
 ル寸ハ年々豊凶アリ米價ニ低昂アリ概算必
 ス立ツ可ラス財政決シテ理ル可ラス新法ハ
 之ニ反シ年々豊凶ニ別テ米價ノ低昂ニ関
 心ス一定不易ノ定稅ナリ概算以テ立ツベク

財政以テ理ル要ニ凡稅法今其定額明亮且下
 長遠徹シ毫毛疑似曖昧ノ事ナキヲ要ス不換
 見ノ法タル詭秘隱微夫若ク其取入豊凶ノ
 勘察シ租稅ノ増減ヲ算定スルカ如田後事
 小吏其柄ヲ握リ持テ民ヲ欺之ヲ知ラズ亦
 サルモノナラス或ハ地房ノ長官ナル者モ亦
 其成ヲ仰ヒ以テ帳簿ヲ一閱スルノ苛酷
 寛漫一差小吏ノ意中伏在テ存ス所謂雖ニ兵
 卒假使盜ニ糧ヲ齎ス所類ニシテ之身至危至
 險ノ法ト云交サレテ得テ其他人民各自持地
 地租ノ定額ヲ知ラズ私欲區戸長ノ間ニ行ハ
 七冗費宿民ノ間ニ生スル等各種ノ弊害アリ
 新法以テ之ヲ反シ明白簡易稅額一定券面ニ明

記す假令老奸宿猾了るも私利ヲ謀るの間隙
 ナリ税額増減ノ為メニ上下交利ヲ争ヒテ日
 月以費用下ヲ消糜シ或ハ等教煩雜ヲ涉ルヲ
 以テ之ヲ俗吏輩ニ委セテ其ヲ得サレ等ハ弊
 害一切了ル下ナリ是断然旧法ヲ唾棄シ新法
 施行ノ議ヲ決定スル所以ナリ又ハ其論
 其論
 第二款以新法減税ノ所由及ヒ財政上
 利害得失
 問曰聞ク新法ノ行ハル、方法上ニ於テ地稅
 ハ減スヘキノ理了リ其減額或ハ三四百萬円
 ニ下ラサラントス若夫然ラハ則方今国家内
 外多事ノ際公費ノ或ハ給セサランヲ恐ル抑
 財政ハ經國ノ要務ナリ故令萬機皆之ニ因テ

活動ス敢テ問フ説
 答曰所問ノ如キ然実ニ新法ヲ施行スルニ當
 テ一顧也此可ラカク緊要の事一顧也然
 リ而テ徐々之ヲ思ヘテ其憂尚之ヨリ甚シキ
 モハアリ減額必シキモ憂ハルニ足ラサレモ
 予リ蓋政府ノ事又興シテ改テ洋々ニ必ラズ財貨
 ホカ此可ラズ財貨必ズ民ニ課セザレバ可
 今之ヲ民ニ課セシキ欲ハルニ當テ其能ク民
 カカ堪エテ其堪テ可ラズ其量ラズ漫
 然之ヲ賦課スル可ハ其目的未ダ達セズ
 民力疲弱國庫耗盡ニ至リ了必セテ大凡地
 稅偏重更甚シキ我國ノ如キモ他ニ其比
 類了ル所見ス此民ノ又且奴隸卑屈ニ陥リ

活潑高尚ノ氣力ナキニ其實際ヲ推入寸偏重
苛税ノ與カワテ力アルモノ將ニ多キニ居ラ
シトス假令政府幾多ノ事業ヲ止メ幾分ノ費
用ヲ省却スルヲ得テ此税ノ減セサ
ル可ラズ是則其憂尙減額ヨリ甚シク其有
テ断然地價首分ノ三ヲ以テ地租ノ定額トナ
ス所以ナリ然レト云レ方今各國競進ノ勢恰
ニ駿馬ニ策テ千里ノ路ヲ行クカ如ク我國已
ニ後ルト云レ亦一鞭ヲ加ヘサレ可ラズ然レ
ニ其費用ヲ止ル必シモ單ニ地租ノミヲ仰クヲ
要セズ海關税アリ印紙税アリ車船税アリ
此等ハ皆昔日ニ無クシテ今日ニ存ス政府
ノ果ニ其尚止ムヲ得サルノ費用アル動産以

テ課スヘク商業以テ課スヘク物品亦以テ課
スヘシ是則減税ノ必シモ憂ヲ減シテ是
スル所以ナリ藤田君曰志ヲ想我々連ニ
世人或ハ新法若干ノ減税ヲ恐ルカ力為ノニ
旧法ヲ固守シ他日ヲ待シテ云フモノ不
亦實際ニ注目セテ其謬見ヲ請フ明後四
年以降地稅比較表ヲ添テ其年尙減少
賦税證セシ
明治四年 米千七百七十九百六拾八石
同五年 米千四百六十六百三拾石
同六年 米千四百三十八石
是年ノ少作柄ニ因テ少差アリト云レ旧法ノ
苛酷ナリト上款ニ所謂檢見法ノ危險ニシテ

地租改正事務局

其術ヲ失フニ出ルニ至リテ決シテ防ク
 可ラサルモノナリ夫新法ノ行ハルニ地稅ハ
 實ニ減スヘキノ理有テ増スヘキノ道ナシト
 云凡旧法ヲ固守スルモ亦暗ニ地稅ニ相減シ相
 耗シテ實ニ其底止スル所ヲ知ラズ其暗裡ニ
 相減耗シテ底止スル所ヲ知ルナキハ旧法ヲ
 固守スルト確乎不動ノ新稅ヲ賦テ斷然其減
 不入キヲ減シテ以テ財政ニ基テ立テ以テ此
 民ノ倒懸ヲ解クト孰シカ得孰シカ失深恩熟
 慮セサル可ラズ

因ニ云新法ト旧法トヲ比較シテ單ニ
 法ニ上リ論スル可ハ第三款ニモ説
 如ク若干ノ差アリト云凡隱田切添

切開等ニテ反別ニ増スニ是ハ實際
 所共因ニ大凡四割五割ノ間
 其現ニ相減スル所
 如ク若干ノ差アリト云凡隱田切添
 第三款ニモ説
 其所以及ニ豫備
 間白聞以新法地價ヲ定テ地租ヲ賦スル
 後假令豐熟ノ年ト云其増稅セテ其日以テ違作
 其年分ト云一切減租スル不
 法ニ比テ其層苛酷ニシテ實際漢ニテ行
 其可ラサルニ似テ其日以テ違作
 答曰第一款ニモ論スル如ク財政ニ要スル年
 出入ヲ概算シテ豫メ之ヲ謀ラテ之ニ在

必ス欲ク可ラサルハ歳出ニ供スルニ必ス期
 不可ラサルハ歳入ヲ以テスルカ如キハ財政
 決シテ理リ難ク財政一タヒ其用ヲ誤ル寸ハ
 政令万機皆其活動ヲ失フニ至ル然レ旧税
 法旧税額ヲ固守シテ此一定不動ノ定税ヲ得
 レト欲スルモ決シテ得ヘカラス蓋旧法地租
 ノ率各地其準ヲ異ニシテ六公四民五公五民
 四公六民二公一民等ノ稱アリ其实此ノ如ク
 甚シカラズト云レ概略尚三公七民四公六民
 ノ間ニ在リ其他各種ノ民費限度アル丁テク
 (新法地租三分ノ一トス)殆ト地租ト相匹敵ス
 ルニ至ル已ニ此重税ヲ負フ凶歳免租ナキ能
 ハサル所擇キテ新法地價ヲ算シテ地租ヲ賦

スル利子ニ低昂ニ因テ少差異ナキ能ハスト
 云レ其官ニ賦入スル所ノモテ六概略十分リ
 三、五ニ過キス是則凶荒免租ナクシテ可ナル
 所以ナリ旧法ハ平均ニ苛欲シテ凶歳ニ免租
 シ新法ハ平均ニ輕税ヲ賦ス二番ヲ
 比較計量スルニ新法ヲ以テ民ニ餘裕有テ而
 ヲ財政ノ便宜ヲ得ルモ不苛酷ト云フ可
 ラズ唯損益ノ理此如キモ言テ其名義
 ニ就テ論ズルモ既ニ地價ニ向テ課ス天災其
 他ニテ地行變換其莫價ヲ失フニ至ラサレハ
 免租不可ラサルノ理アルニ似たり然リテ云
 此方今我國ノ人民知識ヤ品行ヤ尚蛮風アル
 ヲ免レズ况田舎細民ノ如キハ莫ニ今日アル

知テ明日ヲ以テ知ラセルモノ比ハ比自是ナリ
 此輩ニ委ニテ豫メ凶荒ノ備ヲ平年ニテサシ
 大活業納税トモ差支ヘナカラシメント欲ス
 此如キハ甚危険ナルコトヲ時勢人情ヲ知ラ
 サルモノト云ヘシ故ニ各地方地租改正ノ成ル
 ニ隨テ篤ク人民ヲ説諭シ義倉又ハ積金等ノ
 法ヲ設ケシムルハ必要ノ條件ニシテ致ク可
 所サレバ急務ナリ是特ニ收稅財政ノ上ニ候
 スルノミナラズ渾テ交際ノ安全ヲ保テ人々
 ノ幸福ヲ増スヘキモノナレバ豫メ地方官ニ
 注意セシメサル可ラス
 因ニ云新稅ハ金額ヲ以テ之ヲ定ムルヲ
 以テ少シ違作ル年ナリテ秋收ノ米額ハ

米減少スナラズ米價隨テ騰貴スル故ニ人
 民得ル所ノ金額ニ至テ大差違アルコト
 其ノチ々收稅止セ差支ハ少シカレハ
 益々第四款各地價賦ノ下地益賦ス
 間曰嘗テ聞ク租稅ヲ収ヤルハ宜シク利益ニ
 課スルカモシテ漲セテ資本ニ課ス可クスト蓋
 貨殖ノ本ヲ減セテ月々恐ルルハナリ經濟學
 者其利害ヲ論スル日悉セテ故ニ西洋各國ニ
 於テ收稅ノ法概シテ人民營業毎歲利益ノ比例
 ニ從テ之ヲ課ス今地租改正ノ法ヲ據ルハ地
 價百分ノ三ヲ以テ地租ト為ス土地ノ代價
 則農民ノ資本ナリ之ニ租稅ヲ課スル上ニ言

所ノ原則ニ背クモノニ非スヤ
 答曰租税ノ利益ニ賦スヘクモ其資本ニ賦
 ス可ラサルハ我輩亦其説ヲ聞ク然レモ單ニ
 此原則ニノ拘泥シ時ト處トノ勢ニ應シテ
 之ヲ活用シ以テ其原理ニ適セシムルヲ知ラ
 ズハ亦迂腐膠柱タルヲ免レス英人某氏資
 本ニ賦スルト歲入ニ賦スルトノ利害ヲ論シ
 曰租税資本時及フ月アルヲ以テ必ス資本
 ニ及ヒ又租税歲入ニ及フ月アルヲ以テ必ス
 歲入ニ及フト思フハ大ナル過ナリ重税歲入ニ
 及フ寸ハ反テ資本ヲ出シテ之ヲ拂ハサルヲ
 得ス又輕税資本ニ及フトモ歲入ヲ餘シテ之
 ヲ拂ハルヲ得入モト此論是適實ナリ蓋旧法

ノ如ク少歲入ニ課スルモノ未云偏重且公
 采コラ可課ヲ以テ資本ヲ減スルハ恐テ亦能
 成テ新法ハ資本ニ賦スル由係比公平均一ニ
 賦テ較輕キヲ以テ資本ヲ減スルハ人憂テ其
 新法ハ地價ヲ算スル先以具土地ノ歲入利益
 ヲ認テ種子肥糞ノ諸費ヲ去リ再ヒ地稅ハ村
 費下ヲ列キ所謂清淨ノ利益ナリ者ヲ得適當
 ノ利子ヲ以テ之ヲ除シ実價ヲ定メ百分九三
 ヲ課ス是其土地ノ利益ニ賦スルモノ也左ノ
 ニ徑廷テ以テ之ヲ唯利子ニ低昂ノ度アルヲ
 以テ少差違アリトス而モ利子ノ低度以下
 モ地價必ス人ノ繁殖象望之ニ屬スルノ地
 價地價隨着貴ク他亦寒村陋巷等ニ比スレ

比較重税ヲ負フ是亦収税の本旨ニ背クモ
非ルナリ唯其理人此如キ人ニテ大
當時ノ勢モ亦止ムヲ得サレモ人
亦葉風俗類廢政治耳モキヲ失ヒ
無ニ事聚欽ト涉テカレク被檢地
キ最甚トス民心之怒亦甚シ
一ト夕日檢地ノ聲ヲ聞カセ先
備テテ也衆人ニ熟知カレテ
當テ利益税ヲ賦セシム欲スル
類似セサルヲ得ス勢モ止ム
賦税ノ一法ヲ述レ大ニ其面目
民心ノ固結ヲ解キタル也今日
實地及別ヲ呈シ露出シ未
地租改正事務局

之此ニ是則當時單一ノ原則ノニテ固守スル
能ハス之ヲ活用ラシテ以テ其原理ニ適セシ
メタル所以ナリ
第五款 地價ニ二種アルノ辨
問曰聞ク新法ヲ以テ算定スル所ノ地價或ハ
實際賣買スル所ノモノト相徑延シ同一ノ地
ニモ官價私價ノ二種アリト是其法ノ宜シ
キヲ得サレノ致ス所ニ非ヌヤ
答曰方今地租ヲ改正スルヤ賣買セカレノ時
ニ在テ當ニ賣買スルモノ價ヲ探シト欲ス是
一大至難ノ條件ナリ子モ新法算定スル所
ノ地價實際賣買スル所ノモノト或ハ相徑延
スルヲ非トセハ先ツ試ニ賣買價ノ性質ヲ見ヨ

地租改正事務局

凡人民ノ土地ヲ賣買スルヤ賣ル者多ク買
者ニ推テ買フ者ハ富ク買フ者ニ推有テ賣ル
ヲ得ス或ハ又買フ者ハ熱心之ヲ買シテ欲
賣ル者ハ之ヲ賣ルヲ欲セザル者アリ此ノ如
キハ事情全ク上ト相及ヌ自ラ地價騰貴セリ
ルヲ得テ渾テ此賣買價ナル者ハ求索ノ緩急
好惡ノ深淺冷熱ニ因テ之ヲ依昂ノ度ヲ十
倍人ニ在テハ決シテ端倪ス可ラザルモノナ
リ茲ニ一個ノ器械アリ子ハ熱心之ヲ好ムヲ
以テ百圓ニテ買ントス我輩ハ之ヲ愛セザル
ヲ以テ五十圓ニ非シハ不可ナリト云フカ如
シ地租改正ノ際地價ヲ求メント欲スルニ當

テ此賣買價天際者ノ目的トスル決シテ之ヲ
知ルヲ得ヘカラス特ニ之ヲ知ルヲ得ヘカ
ナリ人ニテ下ラス若シ能ク各所有主好惡冷熱
ノ度ヲ知テ之カ價ヲ算シ得ルノ術アルニ之
ニ向テ地稅ヲ賦スルカ如キハ大ニ收稅ノ本
旨ニ背キ且賣買ノ度毎ニ地稅ノ額ヲ更ル等
官民ノ繁雜ナリ旧法ニ據テ一層甚シカ
シ故ニ新法ノ地價ヲ算出スルハ第四款中
説ク如ク土地一歲ノ利益ニ因テ實價ヲ定メ
之曰百分ノ三ヲ課シテ以テ五年間地租ヲ定
額トス其七朱ヲ以テ利子ノ極度トナスモノ
ハ不動産ノ利益ハ他ノ動産商業等ニ比スレ
ハ必不低廉ニシテ概略ニ三朱ヲ以テ六朱マ

地租改正事務局

テラ普通トスレハナリ是則該地相當ノ定價
ニ依テ所賣買價中位ヲ得ルモノナリ
第六款改正卒業ノ目的順序
問曰變法ノ要速成ヲ求ムルヲ戒ル地租改
正ノ如キハ實ニ人民財產ヲ増減ニ關シ民心
向背ノ根柢ニ至テ至重至要ト言ハサル
ヲ得テ聞政令新ク地租改正事務局ヲ置キ
頻ニ官吏ヲ派出シ兩三年ヲ期シ其成績ヲ差
セシムル是モ亦事ヲ好テ切ヲ喜フハ徒速成
ヲ求ムル力為メニ恣恣シク然ル非ヌヤ
答曰明治六年地租改正法ヲ頒布セテ以
降各地方官之ニ從事シ其改正許可ヲ得ルモ
ハ僅ニ五六縣ニ過キス必シモ速成ト云フ

地租改正事務局

ヲ得ズ且夫地租改正ノ重要ナル調査ノ精覈
ヲ要スル固ヨリ論ナシト云凡一年ニシテ成
績ヲ舉ル者必ス疎ニシテ五年ニシテ然ル者
必ス精ナルヲ保タズ從事者ノ注意如何ニ在
ルノニ然リ而メ方今此業ノ因循遲緩スハ力
ヲサレモハ實際止ムヲ得サルモ有テ然
リ試ニ此業ノ徐々ス可ラサルハ實迹ヲ見ヨ
茲ニ甲乙ノ二縣アリ大牙相接各年ノ不登
ニ逢フ甲ハ地租改正ノ後ナル力為メニ減稅
スルヲ得ルハ未ダ改正ヲ終サル力為メニ
減稅セサルヲ得ス民情果テ如何又彼米價
ノ如キ既往五年間ヲ平均スルハ法アリト云
凡因循年所ヲ涉ルノ間米價必ス低昂ナキ能

地租改正事務局

分區地價從テ低昂セザルヲ得シヤ彼是相低昂ナルヲ甚シキ民情泉シテ如何此業ニ於テ最恐ルヘク最憂フヘキハ民費少夥多シテ人民ノ疲弊困頓スルヨリ甚シキハテ從事者ノ最注意セサル可ラザル者ナリ彼速成ヲ戒ムル者老成人ノ言語ニ似テ其寔却テ民費ヲ増シ民業ヲ妨ル幾多リヤ且夫天下ノ事之ヲ決スルハ小心ヲ要シ之ヲ行フハ大膽ヲ要ス地租改正ノ業今ニ至リ遲疑不進有ル我輩將ニ言ントス日本政府ハ事ヲ決スルニ果斷ニシテ事ヲ行フニ怯懦ナル者ト大凡自今ノ勢已ニ改正許可得ル者五六縣本年ノ秋租ヨリ改正是得ル時三十餘縣概略官吏ヲ派出シ

此種改正事務局

擔當協議セ長山明年ノ秋租ヨリ改正ニ得ハキモ又モ亦二十餘縣或ハ三十縣ニ及フヘキカ自餘ノ數縣ハ明治十年ニ至テ改正スルヲ得ヘシ此ノ如クニシテ賦政ノ基奉始メテ立テ此民ノ倒懸始メテ解テ地租改正ノ業果シテ明治新政中ノ一次大事タルヲ證スルニ至ラシ

自餘ノ數縣ハ明治十年ニ至テ改正スルヲ得ヘシ此ノ如クニシテ賦政ノ基奉始メテ立テ此民ノ倒懸始メテ解テ地租改正ノ業果シテ明治新政中ノ一次大事タルヲ證スルニ至ラシ

第七款 民心向背 說

問曰地租改正ノ業タル大凡全國三千餘萬ノ人民其利害ヲ蒙ラザルモノナク其財產ノ増減ニ関セサルモノナク至大至難ト云サレラ得スモシ民心向背ヲ察セズ輕々着手スル紛議百出或ハ言フハ力ヲサル運動ノ釀スニ至ラシ果シテ民心歸向ノ目的ヲ以ヤ

也且改正事務局

答曰第一款中ニモ説ク如ク我國旧来地租ノ
公平均一ナラスシテ民産民力ヲ盈縮盛衰ヲ
ナスヤ實ニ甚シ是政府ノ義務上在ラ必ス
改正セサル可ラサルモ立ッ然ル而シテ其民心
向背ノ如キ戸口トニ訪ヒ人コトニ尙フヲ得
ヘカラス從事者復ラウ立法ノ原旨ニ溯リテ
自省スヘシ此法果シテ増税ノ趣意ナルカ果
シテ官ニ利スル所アリテ民ニ害スル所アル
カ果シテ不公平ナルニキ原因アルカ果シテ
煩冗ニシテ民心之ヲ欲セサルハキモソアル
カ果シテ地力ヲ尽シ物産ヲ増殖スルニ害アル
ルカ果シテ曖昧詭秘ニシテ明亮透徹ナラサ
ルカ凡此數者旧法皆然リ新法皆然リス然ラ

則新法ナラ者民心之ニ歸向シ民情之ニ悦
服スヘキ元素ヨリ成立テ毫モ之ヲ厭嫌シ之
ニ背反シテ以テ動乱ヲ醸スヘキ元素ヲ含ム
下ナシ我輩等ニ断シテ言フヘシ民心之ニ歸
向シ民情之ニ悦服スルモノト然リト雖モ民
心ハ面々如ク一ナラス政府ハ万機ハ毎ニ中
正公平ノ繩規ヲ執リ以テ天下ノ為メニ標準
ヲ立ツ譬ヘハ彼裁判法ハ如ク曲直分明是非
判然タルヲ要ス裁判ナラズモト曲者非者
ヲシテ必ス悦服セシヤヘキ元素ナラト云
氏必ス悦服スヘキヲ期ス可カラズ民ニ良莠
ノ別アルハナリ地租改正ニモ然リ一般ヲ以テ
之ヲ論スレハ多少減スヘキノ理アリト云氏

也且文王喜壽局

旧法偏倚ノ甚シキ之ヲ一方ニ取リテハ増スル
キモノ亦少カラズ然リ而テ其増スルキモ
ハ旧来ノ徳田ニシテ多クハ豪農富家ノ所有
ニ屬ス之ヲシテ良チラシシカ當テ悦服スル
ニ務テラシシク或ハ背反シテ以テ他等煽
動セント欲スルハ其被煽動セラルル民
民多クハ咸稅セラルルキモノナリ其大至
愚ニ非ルヨリハ西レハ利匠ル所失モ他少
利スル所ヲ成就スルヲ欲セサルハ必然ノ勢
ナリト云ハ此全國ノ廣キ人口ノ夥キ此大事業
ヲ行スニ當テ必シク一二此等ノ日ナキヲ保
外ス万一不幸此等ノ日アルモ政府ニハ須ク
確乎不拔ニ中正公平ノ繩規ヲ守リ以テ其職

分闋尽テ森然ラズニ天暖昧遲疑模糊模稜
ノ所置テテシ彼良者莠者ヲシテニツテカラ
悦ハシメシト欲スルカ如キハ政府ノ政府ヲ
ル亦爲シカ在ル
第八款 家禄ニ関スル利害得失
問曰概略我國地租三分ノ一ハ之ヲ華士族ノ
家禄ニ糜スルト聞ク而シ華士族ノ家禄ハ米
額ヲ以テ之ヲ定ム地租改正ノ後モシ米價非
常ニ騰貴スルコトアラバ地租全額ヲ以テ之ニ
給スルモ尚足ラザルヲ憂ヒルアルハニ財政
果シテ如何ニシテ之ヲ救フニ當テ審議セサル可
答曰是モ亦新法ヲ施行スルニ當テ審議セサル可
ナル緊要の要目ナリ蓋何レ國何レ民ヲ論

此且文王書齋

セ大未開野蠻ノ時ニ在テハ貨幣流通ノ利益
ヲ知ラズ物ヲ以テ物ニ換ヘ以テ其便利ヲ達
ス分業ヲ法愈々精シク交際ノ親愈々増スニ從
テ始メテ其不便ヲ覺ヘ貨幣ヲ製シテ以テ物
價權衡ノ媒始トナス我國現今米ヲ以テ地稅
ヲ定メ米ヲ以テ家祿ヲ給スルカ如キモ亦所
謂物ヲ以テ物ニ換フル昔時ノ遺風モシテ不
便百出今日ニ在テハ漸然改正セザレ可クサ
ルモノトス然リ而シテ歲入歲出ハ必ク相啗合
シテ離ル可クサルモノナリ地租ヲ改正スル
ニ當テ歲入既ニ貨幣ニ變シテ其當ヲ得タリ
家祿モ亦ス變シテ以金額ト為サレ可ク
不聞ク大藏省既ニ之ヲ議シテ以テ裁可ヲ乞

フ然ルニ祿米ヲ變シテ祿金トナスノ事人
或ハ之ヲ難シスルモノアリ蓋シ士族ノ情願
ニ適セザルヲ慮ルカ夫今日百般ノ事皆貨幣
ヲ以テ之ヲ辨ス家祿獨リ然ラズ士族ニ在テ
至不便ト言フヘシ之ニ加フルニ其之ヲ拊量
シ之ヲ運輸スル煩勞雜費幾多ソヤ今各地數
年白米價ヲ平均シテ以テ各地士族ノ祿金ヲ
定ム士族ノ歲入ニ於テ増減アルトナリ運輸
拊量等ノ勞費ハ免ル亦何ノ苦情カアラレ然
ルモ此此米金改正ノ議因循遲疑スルトア
リテ此米價騰貴財政窮乏ニ所謂精見レ勢
ニ屈スルノ日ニ至テ之ヲ行ク自ラ百般ノ物
議ヲ求サレ得ス神速廟議ノ決セント矣

此米改正事務局

至望ニ堪ヘサルナリ
 第九款 廢法中止ノ害
 問曰地租改正ノ法地方官ノ會議ニ終所司ノ
 群議ヲ尽シテ上諭ヲ以テ之ヲ頒布セラル固
 ヨリ輕易ノ事ニ非スト云凡若列ニ一種ノ良
 法ヲ行ハ之ヲ改ムルモ亦一層ナラシムル
 答曰收税ノ術タル万殊アリト云凡若之ヲ要ス
 七ノ利益ニ賦シ財産ニ賦スルノ二原則ニ過
 キテ所謂一種ノ良法ナル者恐ラクハ利益ニ
 賦スル一法ノ外ニ出ス旧貫ニ依シテ欲ムル
 カ第一款第二款中ニ説ク如ク決シテ能ハス
 新法ヲ講セシト欲ムルカ第四款中ニ説ク如
 ク固ヨリ二原理ニ對シテ利害得失アルナリ

ク却テ時ト處トニ應セサルモノアリ我輩ハ
 當ニ斷シテ言フヘシ 明治六年七月頒布セラ
 ル、地租改正法ノ外方今ニ在テ別ニ良法ア
 ルヲナシ下且夫唯方法上ノ利害此ノ如キノ
 ミナラス時勢人情ニ於テモ亦大ニ關係アル
 所アリ善ヲ見テ之ニ遷ルハ古徳ナリト云凡
 億兆ノ上ニ立テ天下ノ事ヲ處スル必ズ之ヲ
 決スル者始メニ謹ミ之ヲ行フ以テ後ニ惑フ
 ナク敢行必為以テ天下ヲ卒先セサルニ力ヲ
 用テ横議ノ生シテ紛議ニ至ル毎ニ怖々安
 セス或ハ其根柢ヲ搖動スル可ク天下ノ
 事擾々定ムルナク億兆ノ民其率由スル所ヲ
 知ラザラン地租改正ノ業今ヤ往々天下ニ半

ナラントス民費既多幾多ヲ費セシ且新法漸
ク民心ニ決浴シ前ノ洵々及此年凶漸ク定ラ
ントス此際ニ當テハ政府ニ亦個々斷定スル
所ナカレハヘカラス尤視右顧塩ヲ去リ絮ヲ取
ルル時ニ非レバナリ若シ夫然ラズシテ區々
小利害ニ關シ些々ノ小條理ヲ尚ク變法中止
等ノトナラハ民心愈々惑ヒ民費愈々嵩ミ所謂
角ヲ斷テ牛ヲ殺シ枝ヲ斫テ樹ヲ枯ラスルノ類ニ
シテ新政中ノ一大美事ナラ者轉シテ大歎
矢下ナリ万民疲弊困頓スルニ至テ已ニ一必
セリ此念此及ハテ泣血連々亦嘗テ所忍知
ラス

内閣土邊理

此種民費漸

也且文三

